

BASARE

九重からここえへ

vol. 08



特集1：ここづくり

後藤 文生さん、岐部 笹芳さん
井上 哲志さん、井上 クリスティーナさん
戸高 晋輔さん、戸高 朋子さん
木船 至樹さん、足達 龍哉さん
藤澤 昌由さん、音成 葉子さん

特集2:エノハの住む川

工藤 治良さん

●あんしのかばんの中

佐藤 弘子さん、佐藤 ハツエさん
佐藤 嘉子さん、竹野 次男さん
日野 フジエさん

BASARE

九重からここえへ

発行日：2018年3月15日 発行人：九重町公民館BASAREプロジェクト 本書への問い合わせ先：九重文化センター 大分県玖珠郡九重町
TEL：0973-76-3888 Mail：bunika@town.kokonoe.lg.jp Facebookページ：<https://www.facebook.com/basare.kokonoe/>
バックナンバーは九重町HPからご覧いただけます。本書は、無料で配布しております。
本書の一部または全部を無断で複写、複製することを禁じます。Printed in Japan © Kokonoe Town.

KOKONOE FreePaper 2018.3



「九重からここえへ、しあわせのおすそわけ」をテーマに、ふだん着姿のたくさんのいいもの・いい人を町の人人が発見し、まちの人へ伝えるフリーペーパーです。
*バサレとは、大分の方言で「たくさん」という意味です。



vol. 08



岐部 筏芳

竹工芸作家
幾何学模様のように 細密な細工と竹素材の艶かしさが作り出す美の世界
2014年春の褒章で紫綬褒章を受章
作品はメトロポリタンミュージアムにも収蔵されている

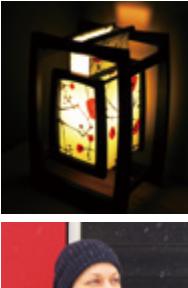


後藤 文生

grow オーナー
木工職人
作品を手に取った時、自然と微笑んでしまう
それだけ丁寧につくられた後藤さんの作品は、顧客との対話の中で磨かれていく機能美が形として現れる



ちょっとした縁やタイミングが
ここで“ものづくり”を始めるきっかけとなった



井上
クリスティーナ

テキスタイル作家
自然をモチーフに形や色を平面上に落とし込む
そのデザインは独創的で色鮮やか



戸高 晋輔
トダカウッドスタジオ
動き続ける木と向き合いながら、作品に表情を与えていく
創り出した形の先にある楽しさおもしろさを、その知識と経験で提案し続ける



ここづくり

あなたは九重町で“ものづくり”をする人たちのことを知っていますか？
職人やアーティスト、作家、ライターなど様々な技を持った人たちが集まり、暮らしの中で見つけた好きな場所や人、そして自分たちのことを知つてもらうための活動をはじめました。それが“ここづくり”です。



普段は個人で活動しているメンバー
ただひたすらに“もの”と向き合ってきた。
孤高のものづくり達が集まつた時、なにかおもしろいことが起こりそうな気がして…
この“ここづくり”は、その思いがキッカケで生まれた。
グループとして活動する中で、それぞれのものづくりに対する考え方の共有、技術を持ったものづくり達が、学校へ出向いて行うワークショップ（ものづくり体験）の実施、また、ホームページやオリジナルのここづくりマップ（ここちず）の作成などを進め、技術高い九重の職人技を広く知つてもらう為の活動を進めている。



戸高 朋子

トダカウッドスタジオ
素材を生かし、尚且つ機能を重視
それでいて無駄のない
デザインは、木のこと
を知り尽くしているからこそ
その為せる技



木船 至樹

ファー・イースト・ホライズン
代表 革細工職人
旅と釣りをこよなく愛する格闘家
使い手の需要にあわせ、完全オリジナルの革製品を生み出す木船さんは、使う人の気付かない習慣やしぐさを見逃さず、ものづくりに反映させている





ここづくりワークショップ

～木の皮を剥く、切る、磨く、削る、名前を焼く～

素朴なえんぴつ作りの中にはものづくりの基本が散りばめられていた

南山田小学校の子ども達と一緒に行ったものづくり体験
簡単なようで奥が深い。思わず子ども達も夢中になってしまい
ついいつ時間がたつのを忘れてしまう
最後には自分の力で作った世界で一つだけのえんぴつができあがり、
ここづくりメンバーにとっては、貴重なふれあいの時間となった



足達 龍哉

つみきの森
MUGA オーナー
子どもたちの心身を伸ばす、とびきりの遊び場を目指し、そのアイデアと行動力で、訪れる子どもたちがワクワクするようなものを日々制作している



藤澤 昌由

書道家
フランスやイギリスの画家を九重町に招いた際のコーディネートをするなど、文化事業への造詣が深い
また、九重町の歴史や人物などについての知識が豊かであり、物語のように私たちに伝えてくれる



井上 哲志

家具デザイナー
有機的な曲線の中に美を表現した井上さんの作品は、シンプルなのに存在感のある家具が特徴
webデザイナーとしての顔も持ち、ここづくりHPの制作も行っている



音成 葉子

ライター
何気なく感じ、見過ごしてしまいがちな日々の自然の変化や、日常の出来事を鋭い感性で描き出す

ものづくりを始めたきっかけは
小さなころのワクワクした記憶だったのかもしれない



ここづくりのHPはこちらから
www.kokozukuri.com

エノハの

住む川

取材・文章 菅田照久

釣り名人の
工藤さん



釣りキチ〇〇 ヤマメ釣り編

「じ」のえを流れる渓流を見ていつも思い出すのがこのマンガ。海遊びで育った私は、父の影響で幼い頃から海釣りに親しんだ。しかしこのマンガと出会い、渓流でのヤマメ釣りに強く憧れた。だが近くにヤマメが住む渓流はない。父に何度も渓流に連れて行ってとねだつたが、渓流までは車で片道3時間。結局実現しなかった。ヤマメが住む渓流は、私にとってずっと憧れの場所のままだった。そんな憧れの場所が、「じ」のえには、ある。



地元の《釣り名人》

「龙门」の滝を上ろうとしているエノハを見た「饭田には多めに放流している」「梶屋や黒猪鹿の川は小さいが、大きいのがいる」「エサはセムシ（トビケラ類の幼虫、水中の小石の裏に巣を作る）が一番いい」川に向かう道中から工藤さんは釣りの話が止まらない。名人は釣りへの情熱で溢れていた。

9月下旬は渓流釣りのベストシーズンとはいえない。よつて一匹でも釣ればいいな、と思っていた私は「10匹は釣りたい」と驚くような抱負を語ってくれた。おのずと期待が膨らむ。

最初にやつてきたのは鳴子川。透明度抜群で川底がはつきり見える。釣り好きじゃなくても思わず覗き込んでしまつ美しさだ。「こんな川は都合にはますない。渓流釣りの禁漁期間（10月1日～2月末日）が迫った平成29年9月25日朝、釣行がスタートした。

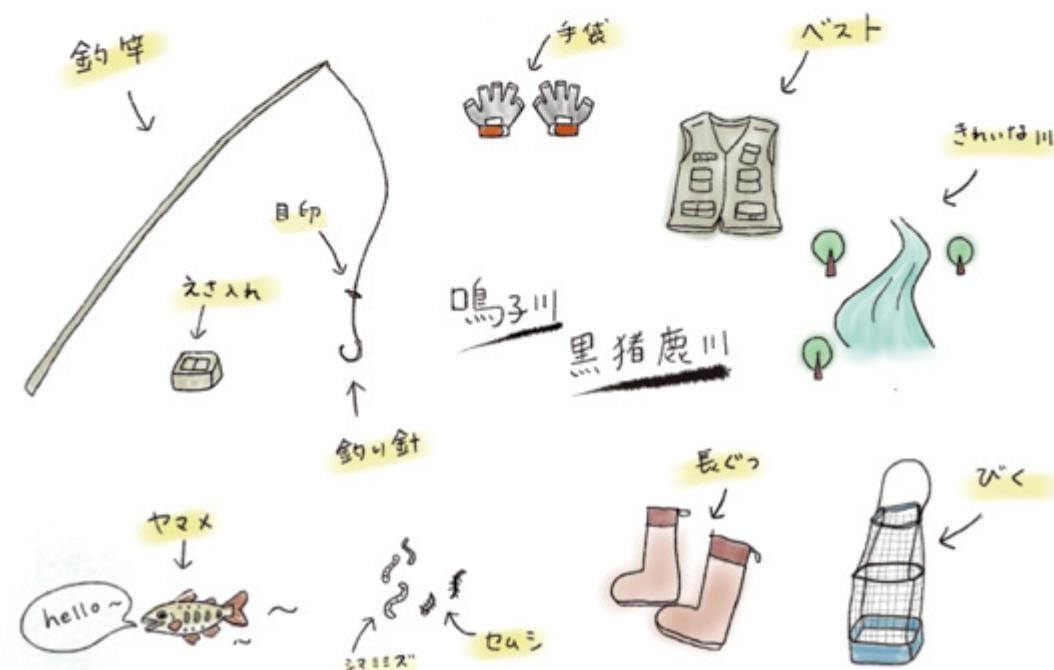
「じ」のえの渓流でのエノハ（ヤマメの地元での俗称）釣りを取材したいーーということで今回お願いしたのは工藤治良さん。町内のある川に精通する『釣り名人』だ。「いいですよ」快く受けていただけた。渓流釣りの禁漁期間（10月1日～2月末日）が迫った平成29年9月25日朝、釣行がスタートした。

いざ、釣行 飯田方面へ



2カ所目で初ヒット

次のポイントの川沿いには高さ2mはあつうかとういう葦がぎっしり生えていた。長年堆積した砂や富栄養化のせいか、「近年はどこも葦がびっしり生えていていつも釣っていたポイントがごとく潰されている」という。しかし工藤さんは自分より背の高い葦の茂みを、足を使い、身体を預けながらかき分けて、ずんずん進んでいく。この人、若い…。茂みを抜けてポイントに着いたが、ここも魚の気配がない。エサのセムシもあまりいない。川の形も変わっている。どうやら台風で大水が出た影響が残っているようだ。工藤さんは気配を消して葦の陰から竿を出すが、「これはやはり厳しいか…。そんな思いがよきり始めた時、竿が曲がった。竿を抜きあげた、その糸の先に魚体が見える。「釣



れた！エノハ！エノハだ！」私は思わず声が出た。魚体には鮮やかな斑紋模様（パーマーク）がある。これが黄色みがかったり、白が大きくギザギザの歯が生えていかにも肉食魚らしい。体の表面にはコートティングされたような光沢がある。小ぶりだが正真正銘のエノハだ。「きれいやな」憧れの魚を目の当たりにして、私は一気にテンションが上がり、エノハはその魚体の美しさから『渓流の女王』と呼ばれるが、その名にふさわしい見事な魚体だ。

「もっと大きいのを釣るよ」感慨にふける私を尻目に、工藤さんは釣りを再開した。

「こんな場所に？!

次に工藤さんは思わず場所を攻め始めた。少量だけ水が流れ込んでくるロットの隙間だ。幅は5cmあるだろうか？一見魚がいるとは思えないが、「エノハはこんな場所に入ってきて流れてくるエサを待っている」といつ。そして実際にそこで2匹目を釣り上げてしまう。

2匹目は20㌢の堂々としたエノハ。1匹目より長さも体高も一回り大きい。このサイズになると貴重を感じる。こんなに大きいのがあんな小さな隙間に…。これは工藤さんでなければ釣り上げられなかつた魚だ。

続いて3匹目。今度は流れ込みで釣り上げた。小ぶりだがこちらも立派なエノハだ。立て続けに3匹。魚影が濃い中で釣った3匹ではない。魚が見当たらぬ厳しい状況の中から、引っ張り出した3匹だ。

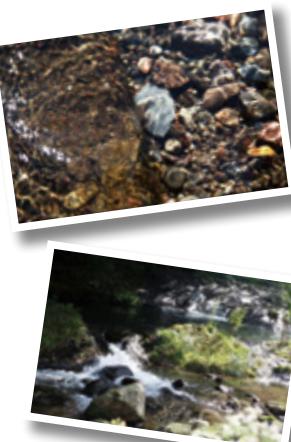


午後は黒猪鹿川へ

お昼ご飯を挟んで午後の部が始まつた。場所は黒猪鹿川。川幅は平均2m位だろうか？小さな川だ。ここでは夏場に30cmのエノハが食針（地域の伝統的な魚を捕る仕掛け）にかかったそらだが、そんなに大きな魚が本当にいるのだろうか？しかし、この日最大のエノハがここで釣れる。

好きなことをしていると
すぐに時間が経つ

その後も数ヶ所回つたが、どこにも魚の気配が感じられない。小さなアブラメ（タカハヤの地元での呼称）が数匹釣れただけだった。「南山田に行つてみよう」工藤さんが言った。「この時季で遅にさしかつていて、納竿の気配はない」「好きなことをしているとすぐに時間が経つてしまう。お昼を済ませて、黒猪鹿でやつてみよう。あんた、時間大丈夫？」もちろんOKだ。それにしても、フットワークの軽さとスタミナがすごい。まるで20代の人と釣りに行つているようだ。



納竿、次は平成30年3月だ

この後納竿となつた。私は工藤さんの釣りを一日見せてもらい、4匹釣れたのが見られて満足だった。しかし工藤さんはやや不満げ。いつもはもつと釣れるのだろう。ただ、これまで工藤さんは釣りに行くのだろうと思つた。悔しくてまた行きたくなるのが釣りだ。9月でシーズンが終わり、次に遙流釣りが解禁になるのは平成30年3月だ。



エノハが住める環境

なかなか釣れないだけに釣れた時の喜びが大きいエノハ。それは言い換えれば個体数が少ないということだ。禁漁期間が設けられたり、放流が定期的に行われたりするの個体数を確保するため。また、エノハは決まった条件下でしか生きられないといわれる。よつて生息エリアは上流。さらに、豊富な工事がないといけない。川沿いに木があることで昆虫類が川に落ちたりして供給されるし、水がきれいなことで水生昆虫などが多く生息できる。そして、川が「S」字に蛇行するおかげで瀬ができる、産卵することができる。それから、川底が「J」字にして複雑な流れがあることで水中に酸素が行き渡り、成長を促してくれる。



贅沢な夕食

この日の夜、我が家では工藤さんが釣ったエノハの塩焼きが食卓に並んだ。贅沢な夕食。釣りは帰つてからも「食べる」という2度目の楽しみがある。食べてみると「うん、美味しい！」白身でくせがなく、やわらかい。とても食べやすい味だ。おのずと箸がすすみ、きれいに食べてしまつた。釣りも食も堪能した日となつた。



工藤さんはその後も川沿いを釣り歩いた。川の真上に木が茂つて竿が振りにくい所でも、あつさり狙つたポイントに投げ込んでいく。見事だ。そして必ず川から離れたり、しゃがんだりして釣る。魚から人が見えないようにするためだ。「警戒心が強いエノハを釣るには大事なことなんよ」と工藤さん。豊かな川、それにこういった釣り人の技術や知識、気配りが加わつて初めて釣れるエノハ。釣るのは難しいがだからこそ釣れた時の喜びが大きい。そして、釣れなければ悔しくて、釣れたら嬉しくて、また行きたくなる。それが釣りの魅力だ。

釣れたら嬉しいくて、また行きたくない。



9

*川での釣りは玖珠郡漁業協同組合の遊漁証が必要です。近くの釣具店など取扱い店でお買い求めの上釣りをしてください。



バックは手さげタイプです

孫のペンケースを愛用しています。孫はこのペンケースのことを。忘れちよりましたけどね(笑)

佐藤 嘉子さん



日薬は必需品です



佐藤 弘子さん



おしゃれになります!!

知りたい



大事に使いります

荷物が運べて杖代わりになつて疲れた時には座れる!!

認知症サポート リング
脳イキ教室の必需品



私たち
お揃いの手袋です♪

安全第一で運転しています

見たい

あんしの

カバンの中



ショルダー タイプが使いやすい



あ~ち~お茶が入っちょります



佐藤 ハツエさん

孫の使っていた水筒なんですよ~



お出かけ必需アイテム
シルバーカー



まだまだ使えますよ~

筆記用具



家で淹れてきました



筆記用具



クシはこんタイプがいいですね~



何でも入る
バックです!

いつ買ったかは忘れました(笑)

日野 フヂエさん



バスの時刻を確認するのに必需品なんです